「学校における排除と社会的排除・貧困問題」

大阪府立大学人間社会学部　西田芳正

0.　はじめに

1.　子ども・若者と社会的排除

1−1　格差社会の深化・拡大

・　近年あいついで公刊されている「格差」をキイワードとした書籍。
　　「所得格差社会」「資産格差社会」「健康格差社会」そして、「学力格差」「希望格差」、、、
・　格差・不平等の実態と諸相

1−2　「若者の危機」＝安定した大人の地位に移行することが困難に＝「フリーター」「ニート」問題

・　「1990年には183万人だったフリーターが、2001年には417万人。若年層の4分の1。」
・　安定した大人の生活に移行することを希望してもかなわない、「はじき出される」「排除された」若者たち
・　不平等問題、格差社会の現れとしての「フリーター」

1−3　「子どもの貧困」の拡大

・子どもの貧困率は近年上昇傾向。母子世帯の貧困率は極めて高いが、全体の上昇傾向は所得悪化が原因。
・子どもの貧困率が特に高いのは、母子世帯、多子世帯、親年齢が若い世帯、乳幼児がある世帯。(阿部2007)

1−4　「子どもの貧困」「若者の危機」「格差社会」が生まれる背景

○　経済の変化
・　グローバリゼーション　　製造業の海外流出と人件費削減の圧力
・　ポスト・フォーディズム　　大量生産から短期集中生産へ
・　IT化　　ホワイトカラー職の削減＝「事務職」の縮小と海外委託
・　サービス業の拡大　　必要な労働力の可変性　必要なスキルの低さ
　　↓↓
　　雇用の不安定化（柔軟雇用戦略）と貧富の格差拡大＝社会的分極化

＊　日本特有の現れ方とその背景
　・欧米では80年代から「若者の危機」が「若年失業問題」として顕在化　社会的対策も
　・日本では時期的に遅れ、「フリーター問題」として顕在化した背景は、、、
　　90年代初めまでの日本経済の好調さ
　　「家族−学校−企業」が大人への移行を支える体制の崩壊
　　(社会の側に移行を支える制度や認識の欠如)
　　パート労働市場（女性向けで極めて低賃金）の存在
　　〜企業の人件費低減策は、解雇より非正規雇用の拡大として遂行
　・「若者の意欲、意識」に原因が帰され、「キャリア教育」「再チャレンジ」が対策とされることの問題性
　　NEET（Not in Education,Employment or Training）と「ニート」の違い

○　教育の変化
・　豊かさ、情報化、雇用の不安定化などにより学校教育の正当性の低下（低学力化＝学習離れの階層的現われ）

○　家族の変化
・　離婚の増加＝子ども、若者にとって「あて」にできる基盤の崩壊
・　家族を支えるネットワークの弱体化による家族の孤立と病理
・　未婚の増加（格差社会の現れとして）

○　政治の変化
・　新自由主義、構造改革が社会の不安定化、格差拡大を助長

1−5　「社会的排除」の焦点としての子ども・若者

- 欧米の動向　　早い時期から問題化。英などＥＵ諸国では国をあげての対策。
- 「社会的排除とは、社会的、経済的、政治的な活動への参加に必要な資源を個人、家族、集団、地域社会から奪い取るプロセス。このプロセスは、主要には貧困と低所得の結果としてもたらされるが、差別、低い教育達成、劣悪な居住環境など他の要因によっても強化される。人々は、学校、医療、福祉などさまざまな制度、機関から得られるサービスを利用し、社会的ネットワークに支えられ、成長の機会を経験して生活しているが、このプロセスによって長期にわたって切り離されてしまう一部の人々が存在する。」「排除状態は自尊心にも影響し、そうした状態が次世代に引き継がれる傾向がみられる。」（Pierson, J.、2002 に一部加筆）

2.　「大阪フリーター調査」から浮かび上がる「排除された若者たち」の姿（別添資料）

2−1　「大阪フリーター調査」の経緯と概要

2−2　生育する家族が抱える困難

- 経済的困窮、不安定さ　　健康面、家族関係など複合的な問題

2−3　学校からの早期の離脱

- 小学校に上がってすぐという早い段階から「授業がわからない。勉強おもんない。寝てただけ」という事例。
- 「勉強がわからない、おもしろくない」という子の比率は学年とともに増加。
- 対象者の多くが不登校を経験。

2−4　「遊び」への没入

- 「遊びで夢中」の日々
- 「ホカチュウ」のネットワーク

3.　排除をもたらすメカニズム

3−1　「本人と親の問題」か

- 「本人にやる気がないから」「親がしっかりしていないから」と思われがちだが、、、
- 欧米の「アンダークラス」論は本人、親の責任に帰す典型的立場。
- 「チャンスは平等に与えられている。がんばれば勉強できるはず」（＝勉強できないのは、本人の努力不足、親がしっかりしていないから）という見方にも共通。

3−2　困難な条件

- 経済的条件の大きさ（「家がしんどいから専門学校には行けない」）
- 親の失業、病気、離婚等、困難な条件の重なり

3−3　親・家庭からの支援の弱さ

- 「引き止め」の機能不全とその背景
  「親はうるさく言うけれど」「うっとい」「何言ってるかわからん」「他の子もやってる」
- 目標提示のむずかしさ（「俺、中卒やから、高校進学のことって、わからん。息子に言えない。」）
- 学習支援の不利

3−4　ジェンダーの罠（後述）

3−5　生活の現状についての評価

- 困難な生活状況を、「困難」「剥奪的」なものとして捉える度合いが小さいのではないか。
  「（下のきょうだいも）行ってない。行かんかったらええんちゃいますか。（自分も行かなかったけど）俺でなんとかなってんねんから。」

3−6　「遊び」と不平等の再生産

- 「勉強がわからない」「家庭が不安定」→不満、ストレス→逸脱的行動　ではなく
  「こんなことしてて大丈夫？」というリスク感をもたず、学校に引き止めるつながりも弱く

「楽しい」遊びの世界に没入（＝学校教育からの離脱）し、
限定された周囲の生活像＝モデルを参照しつつ、
仲間集団の中で将来像を互いに強化しながら
親と同様の不安定な職業、家庭生活に移行（＝親世代の不平等が世代をこえて受け継がれる）

4. 高校生の生活と進路意識、高校卒業後の若者の状況について

4−1 「高校生の生活と進路意識調査」（別添資料）

- 「大阪フリーター調査」の知見を確認する目的
- 主な知見

4−2 「高卒無業層」急増の背景

- 高校生への求人の急減
- 「やりたいこと」志向と進路指導の変容
- 背景にある経済格差　　就職・無業と専門学校・大学進学を分けるのは親の経済力

4−3 「高卒１年後の追跡調査」の知見から（乾編 2006）

- フリーター層　・就職層
- 専門学校進学層　・大学進学層

4−4 「大阪の若者の仕事とくらし」調査の知見から

- 家庭背景→早期の学校からの離脱→不安定就労
- 「非希望層」（働こうとしない若者）は以前から一定数存在したが、増加はしていない。
  無業層で増加しているのは「求職型」
- 不安定就労層の孤立化
- インタビュー調査から読み取れる若者の困難

5. ジェンダーの罠

5−1 性別役割意識と家庭像によるリスキーな生活の選択

- 「早く結婚して、若いお母さんになりたい」「専業主婦に。家計の助けのためにパートに出るかも」「相手は、男らしいトビの人とかがいい。フリーターはぜったいダメ。」「みんな子どもできて、落ち着いて。未婚の子もいてますけど。子ども産む前に別れてとか。でも、そういうふうに落ち着きたいなって思う。」

5−2 「少女と社会的排除」

- 家事、介護を期待され、学業達成への期待は低い、教育達成→職業達成モデルの不在、人間関係の重視等の要因が女の子をはじき出されやすいリスクグループとしている。

5−3 母子家庭の現状

- 日本の貧困層の大きなグループとしての母子家庭。
- その生活困難と世代間継承

6. 社会的排除と学校からの排除

6−1 社会的排除と学校からの排除の連関

- 「social exclusion と school exclusion が原因・結果として互いに関係している」
  （社会的排除）　（学校からの排除）

6−2 早期の学校からの離脱と「落ちこぼれ」

- 「小学校にあがってすぐから勉強わからない。おもんない。今も計算や漢字はむずかしい。」

6−3 「脱落型」の不登校

- 不登校について学校の管理的、競争的なあり方を原因とする見方や子どもの側の心因性のものと見る議論があるが、「そもそも家庭の養育能力に問題があって、学校に行くための前提ともいうべき環境が整っていないようなケースが相当数存在」し、こうした「脱落型不登校」は中学校に入ると激増する。（保坂 2000）

6−4　「指導困難生徒」と排除

・　「荒れる生徒」「問題行動をとる生徒」を「切る」「ゼロ・トレランス」　（イギリスにおける退学処分）

7.　被排除層の支援と社会・学校のつくりかえ

7−1　社会的排除層の支援と予防

・　イギリスにおける国をあげての「社会的排除対策」　その重要な柱としての教育支援

7−2　就学前からの学習サポート

・　「ヘッド・スタート」「シュアー・スタート」と「教育行動地区」

7−3　「しんどい」学校への集中的支援

・　ヒトとカネを「しんどい」学校へ
・　「効果のある学校」の存在

7−4　モデル、目標の意図的な提示

・　「勉強したら、がんばったらこんな仕事に就ける」、「こんな仕事もある」「こんな家族、男女の関係がある」

7−5　つながりの重要性

・　「仲間づくり」「集団づくり」の意義
・　ネットワーク研究の知見＝「支える絆」と「橋渡しする絆」

7−6　リスク層としての女子への支援

・　男性中心、ケア役割の負荷、人間関係への過度のウェイト→学校教育からの離脱、
　困難な条件の大人の生活という循環を断ち切り、新しい女性の生き方、男女の関係の持ち方を提示

7−6　同和教育の実践と継承

・　「差別の現実から学ぶ」
・　学力保障と進路保障
・　学級集団づくり
・　同和加配から児童生徒支援加配へ

文献リスト

阿部　彩、2007、「日本における子育て世帯の貧困・相対的剥奪と社会政策」社会政策学会第114回大会報告原稿
青木　紀編、2003、『現代日本の「見えない」貧困――生活保護受給母子世帯の現実』、明石書店
雨宮処凛、2007、『生きさせろ！　難民化する若者たち』太田出版
部落解放・人権研究所編、2005、『排除される若者たち――フリーターと不平等の再生産』、解放出版社
後藤道夫他、2007、『格差社会とたたかう　〈努力・チャンス・自立〉論批判』青木書店
橋本健二、2006、『階級社会　現代日本の格差を問う』講談社選書メチエ
本田由紀・内藤朝雄・後藤和智、2005、『「ニート」って言うな！』光文社新書
保坂　亨、2000、『学校を欠席する子どもたち』東京大学出版会
乾　彰夫編、2006、『18歳の今を生きぬく』青木書店
――編、2006、『不安定を生きる若者たち――日英比較　フリーター・ニート・失業』大月書店
岩田正美、2007、『現代の貧困――ワーキングプア／ホームレス／生活保護』ちくま新書
児美川孝一郎、2007、『権利としてのキャリア教育』明石書店
熊沢　誠、2006、『若者が働くとき――「使い捨てられ」も「燃えつき」もせず』ミネルヴァ書房
耳塚寛明、2005、「揺れる学校の機能と職業社会への移行」、『社会政策学会誌』第13号
宮本みち子、2002、『若者が《社会的弱者》に転落する』,洋泉社（新書）
中野麻美、2006、『労働ダンピング――雇用の多様化の果てに』岩波新書
志水宏吉、2005、『学力を育てる』岩波新書
新保真紀子、2007、『子どもがつながる学級集団づくり入門』明治図書
橘木俊詔、2006、『アメリカ型不安社会でいいのか』朝日新聞社
Pierson, J.、2002、Tackling Social Exclusion、 Routledge